

## パースの「着想論」について

浅 輪 幸 夫

(1)

チャールズ・S・パースの「着想 (abduction)」の理論をかれの哲学におけるさまざまな独創的理論の一つとして指摘する人は少なくない。けれども、その着想の理論に真剣に取り組んでみた人はきわめて僅かである。ポール・ワイスは「パースのあとを追ってこの前途有望な領域〔着想の理論〕に足を踏みいれる準備がいまもって論理学たちにできていない」といって嘆いているが、じつさい、現代の論理学者、科学哲学者たちはパースのこの理論を無視、ないしは回避してしまっている。たとえば、カール・ポッパーの著書、“Logik der Forschung” (探究の論理)<sup>1)</sup>の英訳版の表題は“The Logic of Scientific Discovery (科学的発見の論理)”となっているが、その内容を見てみると、パースの論理学を知る者にとってそのタイトルは羊頭狗肉の感じがしないでもない。ポッパーはその書のなかでこう語っている。「わたしはさきに、科学者の仕事は理論を提示し、テストすることにあると述べた。この作業が開始されるそもそもの発端段階、つまり理論を案出ないし発明する行為については、なんら論理的

分析の必要もないし、またできるものでもない、とわたしは思う。新しい観念がある人の頭にどのようなようにして生じることかという問題は……経験心理学にとっては大いに関心のあることかもしれないが、科学的認識の論理的分析にとつてはかかわりのないものである。……わたしは新しい観念を案出する過程とそれを論理的に検査する方法および検査結果とをはっきり区別するであろう。認識の論理学の課題は……すべての新しい観念が服さなければならぬ組織的テストにおいて用いられる方法を探究することにある……」<sup>(2)</sup>。

ポッパーによれば、仮説にかんして論理学がたずさわるべき問題は仮説がいかにして発見されるかではなく、仮説がいかにしてテストされるかという局面にかざられる。発見の過程はいかなる点からみても非合理であり、論理学のテーマにはなりえないというわけである。こうして多くの論理学者や科学哲学者たちは科学における「新しい観念」の発見や仮説形成という思考過程を全面的に心理学者や社会学者や歴史家の手に委ね、自らはいわゆる仮説Ⅱ演繹体系のわくのなかに閉じこもってしまう。N・R・ハンソンのことを借りていえば、現代の論理学者は「発見の論理」よりむしろ「完成した研究報告にかんする論理」に熱中しているのだ。<sup>(3)</sup> かれらはすでに整理されて提示された仮説を支持する理由や根拠についてのみ語り、仮説が最初に着想される概念的論理的脈絡についてはなにごとくも語ろうとしない。

しかしながら、新しい観念を創造し、形成する局面にはいかなる意味においても論理性はないのか。論理学が取り扱うべき問題はないのか。パースはあると考えた。通常、仮説を思いついたり、仮説を暫定的に採択する情況は洞察、ひらめき、精神の飛翔、天来の妙想、靈感、第六感、直観等々といったことばで表現され、しかも多くの場合はあいそれには一種神秘的で、（文字どおり）不可思議な出来事といったニュアンスの解釈が伴っている。つまり、理屈の介入する余地のない思想活動とみなされている。ということは、現在の論旨にそくしていえば、それは正常

な語義における推理とは考えられていないか、さもなくば、推理、推論であるとしても、（不可思議という以外に）なんの理由、根拠もない推理、推論——こういうのは形容矛盾であるが——、すなわちでたらめで、まったくの偶然に支配された推理、推論であると解されているか、どちらかを意味しているであろう。しかし、認識としての精神作用にたいするこうした理解の仕方はパースの立場からは断乎拒否される。以下の命題はパースの基本的立場を端的に表わしているものである。——

「(一)、われわれは内観の能力をもたない。内部世界にかんするすべての知識は外的事実にかんするわれわれの知識から仮説的推理によって導きだされる。

(二)、われわれは直観の能力をもたない。あらゆる認識はそれ以前の認識によって論理的に規定されている」  
(5. 265)。

認識としての精神作用はすべて推理、推論を含み、それから成り立っているというのはパースの認識論における根本テーゼの一つであった。そしてこれは、パースをして近代西欧の哲学的伝統から脱却させ、新たな観点から哲学や論理学の問題を見直すことを可能にさせた重要な原理の一つであった。パースは経験主義的立場から「デカルト主義」を攻撃し、デカルト、ロックをはじめ近代哲学者たちを支配した「直観主義」を徹底的に批判することに、また一方ではカントの認識論を積極的に継承することにより、<sup>(4)</sup>そうした根本原理を獲得したが、こうした立場に立つかぎり、哲学をはじめ、真の意味での認識活動における仮説形成の局面もその例外的な位置を与えられることは許されない。たとえそれがいかに微妙で理解しにくい厄介な問題をはらんだ過程であろうとも、推理、推論であることには変りがない。パースの着想論を考察するとき、その前提にこうした基本認識があったことを忘れてはならない。かれは他人からなんの評価もえられぬまま、五〇年余の長きにわたってこの着想論の研究に異常な情

熱を傾け、暗中模索しつづけたが、そうしたかれを支えていたのがさきの原理認識であつた。少くともそれが支えの一つであつたことは疑いえない。

さて、新しい観念の着想や仮説形成というのはまったくの非合理的な活動にすぎないであろうか。アルキメデスが、ガリレオが、ケプラーが、ニュートンが、アインシュタインが新しい仮説を発見したとき、その観念はただ漠然とした意識状態のうちになんのわけもなく浮かびあがつた一つのイメージにすぎぬとか、あるいはまったくのたらいの当て推量であるなどはだれも信じない。ある仮説の発想、形成、暫定的採択にもなんらかの理由、根拠がかならずあるはずである。ニュートンが地上における物体の運動法則と天空の衛星や惑星の運動法則とを統一させる観念を思いつき、採用したとき、それまでにかれの脳裏にはさまざまな思想がつぎつぎと浮かんで消えていったであろう。そうした数々の思念のうちにはニュートンの直面している問題と関連性がありそうに思われた観念もいくつかあつたかも知れない。しかし、それらの観念もすぐに、あるいは少し注意を払われたうえで見捨てられてしまったであろう。大部分の思念は最初から問題とは無関係なものとしてなんの注意も惹かぬまま消滅してしまつたにちがいない。そうしているうちに、ある観念が「伝説によれば、リンゴが木から落ちるのを目にして」頭に浮かんだとき、ニュートンは「これならいける、*no*」という感じをもつたにちがいない。アルキメデスの *eureka, eureka*（みつけたぞ）の話は、真実かどうかは別にして、仮説形成の機微をよく表わしている。そうした機会は大なり小なり、多かれ少なかれだれもが経験していることであろう。当面する問題の解決に役立つ仮説、疑問視されている事柄を説明する仮説が最初に着想されるとき、こうした「いける」とか「なるほど」とか「してやったり」とか「有望だ」といった気持や判断が——強弱の程度の差はあれ——伴っている。そして、その気持や判断の随伴には論理的理由があるのだ。ニュートンの脳裏に浮かんださまざまな思想が見捨てられたり、無視されたりしたときに

も、またそれなりの理由が——自覚されぬ次元においてであれ——あったはずである。一般的にいつて、仮説の着想や形成には良かれ悪しかれ理由、根拠がかならず存在していると考えられる。そしてこの理由や根拠はポッパータちが熱心に取り組んでいる、検証による仮説容認のためのそれとは区別しうる性質のものである。再度ハンソンの明解な表現を借りていえば、「仮説Hを容認するための理由」と「Hを心に抱くための理由」とは論理的タイプが異なっている<sup>(6)</sup>。もう少し詳しくのべれば「〔仮説〕 Hを容認するための理由はHを真だと考えるためにわれわれがもちあわせている理由であるの<sup>(7)</sup>にたいして、Hを最初に思いつかせる理由はHを尤もらしい (plausible) タイプの仮説にする理由でありうる」。したがって、その両者は区別して考える必要がある。そしてまた、後者を論理学的主題の一つとして考察する必要がある。パースの後年の方法論的構想のなかに位置づけるならば、演繹と帰納が前者にかかわり、着想が後者に関係するといえよう。

以上の論述から分かるように、着想の問題を考察することは現代論理学の主潮に逆らって、ほとんど未開の地に足を踏み入れることを意味している。そこは不毛の荒地だとある人はいい、また、不可侵の聖地だとある人はいう。しかし、そうした意見に耳を傾けるまえに、自分で現地に行つて確かめてみるのが肝腎であろう。ここでは、結果によつてその意味を知るといふプラグマティズムの精神に従う方がいい。なぜならば、その地がなんであるかについて性急な判断を下さねばならぬ切迫した情況、必要性などどこにもないからである。つまり、それはパースのいう「理性」が対象にすべき問題だからである。

(2)

まえにのべたパースの基本的立場、すなわち、あらゆるタイプの認識過程は推論であるという立場に立つとき、

つきに推論にはいかなる種類のものがあるかが問題になってくる。推論の分類は論理学が行うべき一つの重要な仕事である。それについてパースはこう語っている。「推論は、その解釈項 (interpretant) によってつねに、全体として真理にいたる傾向を保有する同類の推論の一般的クラスに所属するものと了解されている。こうした傾向は三つの仕方で起こり、すべての単純な推論を演繹と帰納と着想へ区別する三分法を生ぜしめる」(2. 266)。つまり、根本的にいえば、推論には演繹、帰納、着想の三種類があり、また、三種類しかないということになる。この推論の分類（三分法）は着想を含めている点で、明らかに、伝統の分類（二分法）と大きな違いを示している。伝統的論理学では演繹が分析的、解明的 (explicative) であり、帰納が総合的、拡張的 (ampliative) であると性格づけられている。分析的推論においては、結論が前提から必然的に導きだされる。その推論によっては、どんな新しい知識、情報も獲得しえず、ただ前提に言明された内容を解明、展開するだけである。これにたいして、総合的推論では、結論は前提から必然的に結果しない。前提で言明されてる事柄を拡張している。この種の推論は新しい観念や知識をもたらしてくれる。

パースは三段論法の第二格を論理的に分析し、そこに帰納と異なるもう一つ別の独立した総合的推論形式があることを発見した。「着想」と呼んだこの推論は、総合的、拡張的である点で帰納とよく似ているが、同時にまた帰納と同一に論じられぬ特徴をいくつかもちあわせているのに気づいたのであった。パースの演繹と帰納にかんする見解は、その「関係の論理学」や確率論などと関連させた部分においていくつかの新たな考察を含んではいるものの、大筋のところでは伝統的な正統の理解の仕方に従っているといえる。しかし、かれの「着想」の理論においては従うべき伝統など皆無であった。そこにおいてはパースは、自らも自負したように、「未踏の地に立つ探検家」(2. 102) であった。「狹隘で形式主義的な推論概念」(3. 228) に固執し、演繹論における「確実性の探究」(デ

ユーイ）に専念する論理学者に批判の眼を向けながら、パースは二つの主要目標を論理学者はもつべきだと主張している。すなわち「第一に、各種の推論のもつ**安全性**（確実性への接近）の程度と種類とを明らかにすること、第二に、各種（の推論）の有する**可能的で有望な豊饒性**（*worth*）ないしは生産的価値を闡明すること」（8. 324）である。「仮説の試験的採用は本来帰納とは呼びえないと思う。とはいえそれは**推理**であり、その**安全性**は低い**豊饒性**は高い」（8. 328）。「**安全性**」を基準にとれば、演繹が最高で、ついで帰納、着想と順次低下する。けれども、「**豊饒性**」の観点からみれば、その順序は逆転し、着想が最高である（8. 327）。論理学が「**安全性**」を重視するのは、その学問的性格からして当然であるかもしれない。しかし、だからといって、「**豊饒性**」の視点を軽視したり無視したりすることが許されるわけではない。現実の経験的科学的認識は各種の推論の複合として存立し、論理学はそうした現存する認識と無関係に成立するものではないからである——もつとも、論理学をもって数学のごとき純形式的学問とみなすならば話はまた別である、が少くともパースはそう考えなかった。分析への過度の志向性や演繹論理をあらゆる重要な推論のモデルとみなす傾向の人びともまだ依然として少なからずいるようだが、そういう人びとはアーサー・ケストラーのつぎのような発言に耳を傾けるべきであろう。かれは偉大な科学者たちの発見活動を念頭においてこう断言している。「かれらの私的な著述を通じてごだましている主題は、すなわち、論理や演繹的推理への（行為のあとの検証のばあいを除いての）**軽視**、あまりに一本調子の精神にたいする**嫌悪**、あまりに矛盾のないことへの**不信感**……あまりにも意識的な思索への**懐疑**なのである」<sup>8)</sup>。こうした主張は行きすぎであり、結果的には空想や精神の飛躍のみを過大視し、論理性をまったく無視する危険に陥りがちであると危惧する人もいるかもしれないが、一方に偏した論理学の現状を勘案すると、この程度の発言は当然あってしかるべきだと思う。ウイリアム・H・デイヴィスがいつているように「じつさい精神生活における創造的洞察力の重要性について

は、その含む意味が、これまでのところしかるべく十分に解明されていない」からである。<sup>(9)</sup> 以上の視点からパースの着想論を眺めるとき、その意義はますますもって明瞭になってくる。

(3)

着想は帰納とともに総合的、拡張的推論とみなされているゆえ、その両者を比較することにより、着想の観念はかなり明確にされる。しかしそのまえにまず、着想の一般的性格を理解するために、パースの与えたさまざまな着想の定式のうちでもっとも有名なものを一つ示しておくことにする。それを選択するのは仮説の着想を独自の推論だと考えるパースの論拠がそれによって比較的よく読みとれるからである。

着想とは「理論と概念を生みだすすべての操作」(S. 56)を包含する概念である。そうした操作が端的に現われるのは科学的仮説に到達する過程においてであり、「科学のすべての観念は着想から生まれる」(S. 145)のである。「着想は論理的規則にほとんど拘束されないが論理的推論であり、結論をあやふやな形で、あるいは当て推量的にしか主張しないのは確かだが、それにもかかわらずきわめて明確な論理形式をもっている。……その推論形式はこうなる——

驚ろくべき事実Cが観察される。

しかしもしAが真ならば、Cは当然の事柄であろう。

それゆえ、Aは真であるのではないかと推測する理由がある」(S. 189)。

人が「さまざまな情況で自ら予期した事柄と異なる現象に直面したとき、かれはその現象の特徴をいろいろ調

べ、その特徴間の顕著な性格や関係に注目し、そしてその性格や関係がかれの精神にすでに貯えられているある概念の特質でもあると認識し、その結果上述の現象の驚ろくべき要素を説明する（すなわち、必然たらしめる）一つの理論が示唆される。

それゆえ、かれはそれらの現象にかんする、さらに吟味されるべきさまざまな理論のリストのうちで高い位置を付与する程度にまで、その理論を容認する」（2. 776）。

こうした過程は一定の条件に従っているゆえに推論である、とパースは主張する。すなわち、仮説は「良かれ悪しかれ、なんらかの理由があるから採択され、そしてその理由は、それ自体的にみれば、その仮説にながしかの尤もらしさ (plausibility) を与えるものとみなされる」（2. 511, n.）のである。「AはAの全内容が、もしAが真ならば、Cは当然の事柄であろう」という前提のなかに現に存在するまでは、着想的に推論されえないのである」（5. 189）。逆にいえば、仮説Aの内容が第二前提のうちに完全に現われたとき、はじめてAは仮説的に推論、もしくは推定される。そこにおける結論は「なんらかの理由」をもった思考過程の結果である。それは思考する人間のたんなる気紛れな好みによって取りだされたものではない。したがって、明らかに、着想は推論と呼べる資格を備えていることができる。

上記の引用文では、もう一つの重要なことが明示されている。それは、仮説は事実や現象を「説明する（必然たらしめる、あるいは合理化する）」ためのものとして提示されているということである。AがCを説明するであろう、あるいは説明するかもしれないと考えられないかぎり、Aは仮説として認められはしない。したがって、当面の事実や現象を説明するということは仮説が満たすべき必要条件もしくは理由の一つである。

さらにもう一つ付言しておくべきことがある。上述の推論形式から明らかのように、「仮説的推論は後件から前

件への推理」(5. 276)である。つまり、着想は演繹論理的に言えば「後件肯定の誤謬」を犯しており、その立論は妥当性を欠いている。したがって前提から結論への記号転換にはいかなる論理的必然性もない。すなわち、前提が真であっても、結論が真であるという確たる保証はなにもないのである。だからして、着想は誤りを犯す可能性が非常に大きい指導原理に則った推論なのである。パースが着着を「弱体な立論」(2. 625)と呼ぶ所以もここにある。しかし、それにもかかわらず、着想は一つの真正な合理的推論であることには変りがない。それは「安全性」を犠牲にして、「豊饒性」に期待をかけるいわば理性の冒険的試行である。

## (4)

つぎは仮説と帰納の比較の問題であるが、これは二つの時期に分けて論述する必要がある。というのも、これはパースの着想論を論じるほとんどすべての研究者が指摘していることであるが、パースの論理学——したがって推論にかんする考え方は前期と後期で非常に変化しているからである。その二つの時期の境目を一九〇〇年頃（パースが六〇歳位のと看）とみるのが定説になっている<sup>(10)</sup>。推論についてのパースの見解にかぎって言えば、前期と後期でのその大きな差異はおおよそつぎのとおりである。前期においては全体として形式的考察が支配的であって、推論は「結論を証拠立てる過程 (evidencing process)」<sup>(11)</sup>として取り扱われ、各種の推論は基本的にはそれぞれ独立したものと考えられている。これにたいして、後期においては、方法的観点からの考察が優位を占めるようになる。だからといってそれはパースの論理的諸概念の根本的変更を意味するものではない——個々の問題についてのかんりの修正や変更がいろいろあるのはもちろんであるが、後期の研究においては、前期における論理的主題の考察の主要成果がそのまま保持されながら、方法的パースペクティブのもとで新たに練り直され、深化させられ

ていったというのがもつとも適当な解釈であるといえよう。三種類の推論は、そこにおいては、探究過程における三つの段階を構成するものとみなされ、それぞれ区別しうる推論タイプでありながらも密接に関連しあうものとして把握されることになる。背景の説明はこの程度にとどめておいて、以下前期と後期のそれぞれにおける二種類の拡張的推理を比較し、着想の特徴を浮き彫りにしてみることにする。

前期においては、さきにも述べたように、帰納と着想は独立した推論形式として扱われている。帰納は、「ある事柄が真である多くの事例から一般化して、その同じ事柄がクラス全体についても真であると推論する」、あるいは、「ある事柄が事例の一定の割合について真であることを知って、その事柄はクラス全体の同じ割合についても真であると推論する」。着想は「非常に奇異な状況に出会い、それはある一般的規則の一事例だと仮定すれば説明がつかぬことを知り、よってその仮定を採用する」、あるいは、「ある点で二つ対象が酷似しているのを知り、そこからそれらは他の点でも酷似していると推理する」(2. 624)。

帰納法では「観察された事実に類似する事実は、まだ吟味されていない事例においても真であると結論を下す」。着想法では「観察された事実とまったく異なる事実〔観察事実を説明する事実〕の存在を結論づける」(2. 636)。

以上の引用からも観取できるように、同じ拡張的推理といっても、帰納における前提から結論への移行においては、経験的に知られた要素と異なる要素が付加されはしない。それにたいして、着想においては、経験的に観察されたものと異なる事物、多くのばあい経験的に観察不可能な事柄の存在がのべられている。つまり、その結論には新しい要素がつけ加えられている。パースの帰納と着想にかなする定義のうちでもっとも簡明なのはつぎの命題であろう。「帰納」は特殊から一般法則への推論である。「着想」は結果から原因へのそれである。前者は分類し、後者は説明する」(2. 636)。

ここで一つの実例を挙げておこう。仮説の説明的機能を示す恰好の例として、パースは気体分子運動論を採りあげている。この理論はボイルの法則をはじめいくつかの単純な定式を説明するために案出された。ボイルの法則によれば、温度が一定のばあい気体の体積は圧力に反比例する。この法則はいわゆる「実験式 (empirical formula)」であつて、特殊事例からの帰納的一般化によつて獲得された定式である。しかし「かかる公式は観察結果を一般用語で記述する手段として大変有用ではあるが、科学的発見のなかでは高い地位を占めていない」(p. 337)。このボイル法則(その他)を説明するために採用された仮説が、気体は小さな固い粒子(分子)で構成され、それらの粒子は通常(その大きさに比して)たがいに遠く離れて存在し、たまたま接近しあうまではさしたる引力や斥力をもたずに高度運動をしている、という理論であつた。この仮説を承認すれば、以下のような結論が必然的に導きだせる。すなわち、気体の容器(ピストンなど)を縮小し、気体に圧力をかけるとき、その気体が押しつぶされな  
 いのは、各分子の有する非圧縮性によるのではなく、容器の壁への分子の衝突のためである。容器が小さくなれば気体はいよいよ圧縮され、分子はますます接近し、壁面の単位面積に衝突する数も回数も増大する。ボイルの法則はこれによつて説明されるのである。<sup>(12)</sup>この仮説は熱力学の原理などとの関連においても支持を受け、信頼しうる説明原理として高く評価されるにいたつた。

ボイルの法則と気体分子運動論の比較においても、着想と帰納とが独立した推論形式であるのは明白である。帰納的結論は、その一般性のゆえに着想によつては到達しえない。他方、着想的結論は個別的事例で直接観察できないゆえ帰納によつては到達できないのである (p. 714)。

ただここで一つ注意しておくべきことがある。それはパースがその前期においても、二つの推論形式のあいだに絶対的境界線を引いてはいないという点である。観察経験の限界を越えて遠く推理をおし進めるにしたがい、帰納

は着想へと徐々に変化していくものとかれは主張している(2. 760)。この連続性の理解は後期の方法的構想への発展の可能性を合意しているのかもしれないが、しかしこの時期において、奇妙に混乱した観念を生みだしているのも事実である。<sup>(13)</sup>

(5)

すでに指摘したように、後期のパースにおいては、着想と帰納（と演繹）は探究における各段階を構成するものとされている。着想は最初の段階、演繹は第二の段階、帰納は最後の段階に位置づけられる。方法的過程でこのように配列されるとき、着想と帰納はきわめて有機的で、相互に規定しあう関係のもとにおかれ、またその関係から種々の興味ある事実が導きだされてくる。

着想は経験的事実から刺激されて始まり、そして「帰納によって検証される未決の理論〔仮説〕を推論者に供給する」(2. 776)。これにたいして帰納は、着想によってあらかじめ推挙された仮説を受け容れることから出発し、その仮説から演繹的に導出される経験的予言を実験に付し、その予言が事実によって確認されるかどうか見極める仕事を司る(2. 96, 2. 755)。演繹を加えて、各種の推論の機能を段階的にのべればつぎのようになる。着想は事実を説明するための仮説を提示する。演繹はその仮説からテスト可能な必然的帰結を導きだす。帰納はそれらの帰結をテストし、もとの仮説の価値を決定する。ここで各推論形式を独立的に扱う前期の観点では理解できない新しい特徴的事柄をいくつか指摘してみると――

まず第一に、着想は経験から仮説へ、帰納は仮説から経験へと、両方は「反対の方向を向っている」(2. 775)。着想はともかくとして、帰納の方向性をこのように捉えるのはきわめて斬新的なやり方であった。こうした観点か

らパースは「未熟な帰納」「量的帰納」「質的帰納」など興味ある帰納論を展開しているが、その議論は小論の範囲を越えている。つぎに、二つの推論は別々に切り離して考えるべきものでなく、一体化して把握しなければならぬ。すなわち、帰納の結論は着想の結論にはかならないのである。第三に、さきに引用した、帰納は分類し着想は説明する、という截然とした区別は無意味になる。なぜならば、説明は着想と帰納両方の作用によってもたらされるからである。着想はある事実を説明する仮説を提示する。しかしその仮説が帰納的に検証されぬかぎり、本来の意味で事実が説明されたとはいえないであろう。

それからつぎに、これはとくに重要なことだが、帰納を検証の方法として捉えることにより、着想の総合的機能がより一層クローズアップされる。科学的認識において着想をとくに重視するパースの考えは前述の気体分子運動論の論述でも示唆されている。しかし方法的構成のなかで各推論形式が見直されるとき、科学における創造性の論理的表現としての着想がもつ意義と重要性がますます鮮明になってくる。いまや、着想は「新しい観念を供給する、その意味で総合的である、唯一の種類の推論である」(S. 171)とパースは断言できる立場に立っている。本質的な意味において観察事実になにかを付加する推論、本質的な意味において総合的といえる推論は着想だけである。着想は「新しい観念を導入する唯一の論理的操作である。なぜならば、帰納は価値を決定するだけであり、演繹は純粋な仮説の必然的帰結を展開するにすぎないからである」(S. 171)。

さいごにもう一つ重要なことを指摘しておきたい。「リトロダクション」[着想]とは、仮説のあらゆる可能な帰結が実験的に検証可能であるがゆえに、その仮説を暫定的に採択することである」(P. 88)というパースの定義にもみられるとおり、着想の推論はのちの帰納的過程によりある種の規制を受けざるをえない。いいかえれば、着想は帰納による検証の可能性を考慮に入れて仮説を形成あるいは採択しなければならない。つまり、この検証可能性

は仮説の形成ないし採択において満たすべき一つの必要条件となってくるのである。この着想に付された重要な条件は前期の観点に立つかぎり認識されることはなかったであろう。仮説が満たすべき条件はこのほかにもいくつかあり、そしてそれらは後期におけるパースの着想をめぐる考察の主要なテーマの一つとなっているが、ここではそれに立ち入る余裕はまったくない。ただわたしが検証可能性を重要な事柄としてあえて指摘しておいたのは、それが仮説の満たすべき諸条件のうちでもとくに重要なものであるからというばかりでなく、この点において着想の概念がかれの有名なプラグマティズムと結びつくからである。パースのプラグマティズムの後期における発展がその着想論の理論的展開と密接に結びついているのは疑問の余地がないのである。

(6)

帰納との比較によって着想の概念がある程度明確になったところで、もう一度さきの着想の定式をのべた個所に向けて、二つの問題を掘りおこして論じてみることにしよう。その一つは「理論と概念を生みだすすべての操作」という概念にまつわる曖昧性の問題である。もう一つは、仮説の徴表と考えられる「尤もらしさ」およびそれにかかわる諸概念を理論的にどう理解したらいいのかという問題である。

「理論と概念を生みだすすべての操作」過程は、T・K・ファンが指摘し、説明しているように、概念的には、仮説を構成する過程と仮説を選択する過程とに区別することが可能である。より詳しくいえば、新しい観念を獲得する過程ないしは「説明的仮説を形成する過程」(S. 171)と、それから、ある観念がテストに付す価値があるかどうかを決定する過程もしくは「仮説を試験的に採択する過程」(S. 388)とに区別することができよう。しかし、パース自身はこの区別をあまり意識していなかったように見受けられる。上記の引用句で分かるとおり、かれはあ

るばあいは着想を仮説形成の操作とみなし、またあるばあいはそれを仮説選択の操作と考えているが、その両者の関係について正面切つて言及した議論は——わたしの知るかぎり——どこにも見当らない。一見すると、これはパースの着想の概念における混乱を示すものであるように思われる。しかし、じつさいにそうなのであろうか。この点はパースの着想論にたいする可能な誤解を防ぐためにも明確にしておく必要があるであろう。

パースの理論において、仮説構成と仮説選択とはどのような関係にあるのか。科学が比較的短期間のうちに多くの真理の発見に成功した事実にたいして、その理由を問うているパースのつぎのような発言に注目してみよ。

「いかなる強制力も強制的傾向も存在しない過程によってこれらの真理のすべてに火が点されてきたのはどうか。それは偶然によってか。思いつくことが可能であった仮説の数を考えてみよ。ある物理学者が実験室のなかでなにか目新しい現象に出会ったとする。惑星の合はその現象に関係がないとか、支那の皇太后がちょうど一年まえの同一時刻にある呪文を唱えたのはおそらくその現象の原因ではないであらうとか、どうしてかれは分かるのであろうか。……一兆の一兆倍もの仮説がつくれるのに真なる仮説はそのうち一つしかないという事実を考えてみよ。しかもその物理学者は二、三の、あるいはせいぜい一ダースの推定ののち、正しい仮説にはば近いところに想到するのである」(5. 172)。

仮説の目的は事実を説明することにある。しかし、ある事実を説明するために人が思いつくことのできる仮説の数は、理論的にいえば、それこそ数えきれないほどたくさんある。したがって、いかなる条件も課せられなければ、仮説を立てることなどなんの造作もないことであり、思いのままにいくらでもつくりだせよう。けれども可能な仮説は「一兆の一兆倍」あつても、「真なる仮説はそのうち一つしかない」し、科学の目的は真理の発見にある。だとすれば、仮説を形成するということは、正しいあるいは比較的正しい仮説を形成するということにならざるを

えない。そして、正しいあるいは比較的正しい仮説を形成するということは、実質的には、多数の可能な仮説のうちから正しいあるいは比較的正しい仮説を選択することとなんの相違もないといえるであろう。したがって、真理認識と無関係な情況——たとえば星占いのような——でならばともかく、科学的脈絡においては、仮説構成と仮説選択とが同じ意味をもつものと理解して一向に差し支えない。両者はいわばコインの表と裏のような関係にある。パースがこうした点をはっきり説明しなかったのは不注意であり、不親切であるといえるかもしれないが、この点においてパースの着想の概念自体にはなんの混乱もみられないのである。わたしがこれまで、仮説を「形成する」「思いつく」「採択する」等々いろいろな用語を適宜に使ってきたのも以上のような理由からである。

ところで、うえにもべたとおり、ある事実の科学的説明のために発想しうる可能な仮設の数は無数にある。しかしそのうちで正確な仮説は一つしかない。あるいは近似値的に正確なものを考慮にいれても、その数は僅かしかない。仮説の選択は、いわば、膨大な母集団のなかから一個の、あるいはごく少数の有望な標本を抽出することに等しい。成功の確率がゼロに近い試行なのである。こうした位相から科学の歴史も振り返ってみると、その成功の歴史は奇跡ともいふべき出来事に感じられる。「人間が思考する動物になったこの二、三千年のあいだに」(S. 59)、かなりの数の真なる理論を獲得しえたのはまぎれもない事実である。この事実の原因を偶然に帰せしめる議論は説得力をもたない。なぜならば、偶然のせいにするにはその実現の可能性があまりにも少なすぎるからである。ではこの事実はどう説明すればいいのか。科学の成功とは仮説形成の成功を意味している。したがって問題はつぎのようにもいいかえられる。われわれが着想に成功するのはいかにしてか。または、人間精神が圧倒的多数の、しかもそのほとんどが誤っている、可能な仮説群をまえにして、真なるもしくは真理に近い仮説を思い当たることができるのはどうしてか。パースは人間精神と実在世界の類縁性という根本仮説とその結果としての一種の本能的能力を

想定してそれを説明している。

「人間精神は、有限数の推測で正しい仮説に遭遇するという意味において、真理と同類の性質を有しているといふのがあらゆる着想の根底にある本源の仮説である。……なぜならば、もしもこうした類の傾向がなければ、もしも実験室である驚ろくべき現象が生起したときわれわれがその規定条件をでたらめに当て推量しなければならぬとしたならば、……科学を進歩させることなど絶対にできなかったであろうから」（7. 220）。

「非常に多くの仮説を試験するまえに、大多数の仮説を不問に付したまま、知的推測によってわれわれがあらゆるテストに耐える一個の仮説に導かれるものと期形しうる、そうした正しく推断する能力を人間精神はもちあわせている、ということが信じられなければ、真理を突きとめたいというわれわれの要求がいかに切実なものであらうとも、真理を学びとろうとする試みをいつさい断念した方がいいであろう。もちろん、テストの過程それ自体においてはこうした神秘的推断力を仮定する必要などまったくないことはいうまでもなからう。そうした仮定の導きをうけなければならないのは、テストさるべき仮説を選択する局面にかぎられる」（6. 530）。

この仮説選択過程で仮定されている「正しく推断する能力」はまた「正しく推断する特別な資質 (aptitude)」、「真理への本能的嗅覚 (instinctive scent)」、「洞察力」、「自然の光」その他さまざまなことばで表現されているが、要するにそれは真理への志向性を有した認識の本能ともいふべきものである。それは仮説選択の過程においてある仮説を「尤もらしい」と感じとる能力、もしくは「尤もらしいものについての感覚 (a sense of the plausible)」ともいい表わせよう。新奇な現象に直面し、その現象の特徴を調べながらあれこれ思案するうちに可能な説明を与えるある仮説が脳裏に浮かんでくる。「この説明のゆえに結局探究者は自らの推定もしくは仮説を好意的に処遇するようになる。わたし流のいい回しをすれば、かれは暫定的にその仮説を「尤もらしい」ものであると考える」

(6. 469)。Plausibilityの「plausibility」の本質はなにか。

「尤もらしさとは、われわれの本能がある理論を好意的に処遇せよと勧告する以外いかなる類の証拠ともかわりなく、その理論がわれわれの信念にたいして当然自己推挙すべきその度合のことを意味している。人類以外のすべての動物種には確かにかかる本能が備わっている。人類にたいしてだけなぜその本能を否定するのか。……疑いもなく、現代の自然科学者といえども、いくつかの仮説のうちのどれを最初にテストに付すかの選択に当っては、相変らず、主としてそうした尤もらしさによって支配されているのである」(8. 223)。着想の段階において科学者はこうした「尤もらしさ」を感受する感覚ないし能力によって、多くのばあい、有望な仮説と見込みのない仮説とを弁別している。着想はこうした感覚や能力を依然としてその強力な一つの支柱にしているのである。

人間精神はこの能力をいかにして獲得しえたのか。それは神秘的な神の配剤によるものでも、たんなる偶然によるものでもない。それは進化の過程をとおして本能的生活——主として、食物摂取と生殖活動——のなから引きだされたものである(11. 18ほか)。ではまたその進化はいかにして可能であったのか。根本的にそれを説明するものとしては、結局、前述の人間精神と実在との類縁性という原理を想定する以外にはない。「この宇宙はその個々の部分の総体である。われわれはみな自然の所産であり、自然のいたるところにみられる特性を自然に分有している」(5. 613)。こうした本源的原理のもとに、進化の過程で人間精神は自然の諸原理、諸法則といった一般的特性を把握するに適した知的能力を発達させてきた。もしも「人間の心に浮かぶ観念と自然法則にかかわる観念とが一致に向かう自然的傾向」(7. 220)がなければ、われわれの推論が真理に到達することなど望むべくもないのだ。だからして、「自然は人間精神に観念を孕ませ、その観念は成長すると父親たる『自然』とそっくり似たものになるというのはたんなる比喩的表現以上のものである」(5. 591)。

さて、論理的推論過程としての着想ならびに着想と不可分の関係にある「尤もらしさ」の概念をめぐって展開されている上述のパースの理論をわれわれはどのように理解、評価すべきであろうか。われわれはここでまさに大変な難局に直面しているのである。紙幅も尽きたので、以下問題提起の形でごく簡略にのべておく。パースは科学の成功、仮説構成の可能性を説明するために本源的原理として人間精神と宇宙との類縁性を仮定した。その観念は科学や着想における事実、実践を説明する一つの仮説として容認しうる——わたしは少くとも不合理な仮説とは思わない。けれども、その観念は着想を正当化するものであるかという点になると厄介な問題が生じてくる。それは仮説構成過程としての着想を正当化するのに仮説をもってするという一種の循環論法になっているからである。もちろん循環論法かならずしも悪循環とはかぎらないが、この点をどうするかは着想論を理論的に支持するうえで大きな問題である。<sup>(16)</sup>

本能的着想能力についても同じ程度に厄介な問題が指摘できる。たとえ進化論的発達の結果としてその能力の存在を認めるとしても、その能力の実際のあり方、働き方を分析的に考察したところで、パースの論理学観からすれば、その考察は着想の論理を解明することにならないからである。なぜならば、パースはミルやデューイらの心理主義的論理学に異を唱え、思考がいかにあるかの研究は思考がいかにあるべきかの研究の土台にはならないとつねに主張しているからである。だとすると、パースの着想の本能論的考察は着想の規範的考察とどのような関係にあるのか。この点もパースの着想論がはらむ困難な問題の一つである。<sup>(17)</sup>

パース自身はこうした難題やこれに類する難問が自己の理論に数多くあることを十分認識していた。そしてその解決がどれだけ困難であるかも十分承知していた。「日暮れて道遠し」といった感懐を覚えたときのことであろうか、かれはこんな呟きを洩らしている。

「論理学にかんするわたしの印刷物にみられるものは、地下に埋もれたまま残る豊かな鉉脈の断片的に散見せられる露出部分でしかない。思うに、そのうちの大部分はすでに書きとめられてしまっているが、それらの断片をまとめあげる仕事はだれにもできていないであろう。わたし自身にもできていないであろう」。(8)

〔註〕

- (1) Paul Weiss, "Charles S. Peirce Philosopher," Richard J. Bernstein ed., 'Perspective on Peirce—Critical Essays on Charles Sanders Peirce,' New Haven and London, Yale University Press, 1965, p. 125.
- (2) Karl R. Popper, "The Logic of Scientific Discovery," Harper Torch Books, Harper & Row, Publishers, New York and Evanston, 2nd ed., 1968, p. 31 [カール・R・ポッパー『科学的発見の論理』(上)(大内義一・森博訳) 恒社厚生閣(一九七四年)三五頁参照]
- (3) Norwood Russell Hanson, "Notes Toward a Logic of Discovery," Richard J. Bernstein ed., op. cit., p. 45.
- (4) "Collected Papers of Charles Sanders Peirce," ed. by C. Hartshorne & P. Weiss, Harvard University Press, [以下 CP. に略記する] vol. V, par. 265 を示す。(以下同様)
- (5) ヒューズはカンツの認識論の継承はならぬと認めるところになる。カンツによれば、感覚の多様が概念により統一にもたらされるまでは認識は成立しない。したがって、認識にはその多様を統一させるための、多様なのならぬ操作、働きかけが必要である。そこで「認識を生成しめるためのデータの操作が推論と生成の過程」(Murray G. Murphy, "The Development of Peirce's Philosophy," Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1961, p. 21)。
- (6) Norwood R. Hanson, op. cit., p. 45.
- (7) K.T. Fann, "Peirce's Theory of Abduction," Martinus Nijhoff, The Hague, 1970, p. 4.
- (8) ノーサー・ケストラー『創造活動の理論』(上)(大久保直幹他訳) ミラティス、昭和五〇年) 一五二頁
- (9) William H. Davis, "Peirce's Epistemology," Martinus Nijhoff, The Hague, 1972, p. 26.
- (10) Justus Buchler, "Charles Peirce's Empiricism," Kegan Paul, Trench, Trubner & Co. Ltd., London, 1939, p. 131, Thomas A. Goudge, "The Thought of C.S. Peirce," University of Toronto Press, 1950, p. 197, K.T. Fann, op. cit.,

- p. 9を参照のこと。K・T・フアンは一八九一—一九八八年がその過渡期であると実証している（同書、二八頁以下）。
- (11) T.K. Fann, *ib.*, p. 9.
- (12) パースも付言しているが、もちろんこの説明は正確ではない。もともと、ボイルの法則が不正確なものであるし、また分子運動は引力・斥力により複雑な状態を呈するからである（2. 639）。
- (13) たとえば、2. 634に記されている着想が従って述べられた諸則をみよ。
- (14) T.K. Fann, *op. cit.*, pp. 41 ff.
- (15) Nicholas Rescher, "Peirce's Philosophy of Science," *University of the Notre Dame Press, Notre Dame, London, 1978*, p. 44.
- (16) N・レシヤーは科学的方法全体の観点からみて、これを悪循環でないと主張しているが、かれの論証では着想の独自性をどう説明するかの問題が残ると思う。N. Rescher, *ib.*, p. 51.
- (17) T・K・フアンはこの本能論を着想の論理学と本質的には無関係な議論とみなしている。その意見は大変説得力があるが、それでも疑義が残る。仮説選択の基準としての単純性の概念がそれで十分説明できないように思えるからである。  
T.K. Fann, *op. cit.*, pp. 35 ff.
- (18) CP, vol. II, p. 2.
- 〔付記〕 註に記した著書、論文のほか、本稿で参考にした主な文献は以下のとおりである。James K. Feibleman, "An Introduction to the Philosophy of Charles S. Peirce," *The M. I. T. Press, Cambridge, Massachusetts, and London, England, 1969*; "Studies in the Philosophy of Charles Sanders Peirce," ed. by Philip P. Wiener and Frederic H. Young, *Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1952*; Norwood Russell Hanson, "Patterns of Discovery," *Cambridge University Press, 1979*; 米盛裕二『パースの記号学』勁草書房、一九八一年。